

^ 13  
3136  
3



門 へ 13  
號 3136  
卷 3

昭和九年  
九月十二日  
晴



雲助の縛曰囉唎と考悉管根八里ハ光陰の隙行  
駒で越夏迅如も超お踰出ぬ大晦日翌と年の峠の  
胸お支辛くも過後遠頭一々夜超との春は留  
息。毎年元日ら知如。咽え返る異を忘れ春ごと  
持病の遊惰碎倒れ云惜氣か。仇小丹日と昔是  
夏後の生貨を。氣と鼻乃下云春の日と但は長く。

一巻一節

酒の出す續ぶ困る。合の盃呑まず。長持唄引替  
て。中務の如く疲世帯。行路難々往烟。四十圍り悟重の  
岸下。算下りの教諭を急れ。昨日今日の翌日。後一節ら  
浮世の縁ふ。始と今ふる外果。先陰の夫先は後り。  
時光の早き追れ。山ど松の一里塚も。夏の如く過る。  
お正月を候託。昔ふ愛り。野の智恵袋。空られを。

世後の終用は後。往方の規ぬ道中。老老ながら  
善い氣賃病と。返送れ。三尺下り守り。有るは遊蕩の  
梅子。踏ぬ夫の息杖。夫思案の立場。踏と談合。  
其間。争場も通る。道常拈得。夫の縁。夫の縁。夫の縁。  
踏迷ひ諸國。以聊の旅僧。擬き。まよと木と竹。竹と木  
徒て連と物。至極難長。の度相。どうも。道向。月

一七九

一、（質屋の宿りの借の性向の角を借が、世の角を借が有。是等しき如く迎せられ、困果して、必迫し、雑加下、發客の短兵急よる、稿の借は、頻り、時好し送れ、向合、教圍ハ、素物、今更詮方、机向し、趣向、志、通、給、出、最、ま、思、出、中、稿、在、此、字、の

故人の糟粕。紙り、おろ、澤夜、也。作者の、（身の上話也。取交し、書取の、云、論、僅、責、塞、を、一寸、道、れ、斯、如、維、時、丁、の、未、の、仲、冬、智、惠、と、骨、越、の、籤、に、交、も、お、金、指、針、の、金、貸、人、借、金、を、よ、云、決、の、眼、江、戸、批、川、の、市、隠、

一筆茶寮設り誌



弘化五戊申歳發兌

利欲の迷所

五穀の遺棄  
 買子と長考と林  
 長考酒との象  
 味あり富高大買  
 肝とつむと能万を  
 うととと長考と林  
 長考酒との象  
 味あり富高大買  
 肝とつむと能万を  
 うととと長考と林  
 長考酒との象  
 味あり富高大買  
 肝とつむと能万を



あつては...  
 利欲の迷所...  
 利欲の迷所...  
 利欲の迷所...  
 利欲の迷所...  
 利欲の迷所...



人間萬事  
迷所全圖

欲道の辻



五塵六欲といふは五塵は  
色声香味觸  
五欲より六欲は欲界の  
六天四王切利夜天兜  
率樂變化他化自在  
見ありた生るく活きの  
欲を死にたりのを無欲の  
聖賢ありとてはまの眼を  
とをまじりて欲やんま  
おのつと利欲のよふ身と  
あらばしとどしとらひた  
りしあふとくはむむむ

利欲

飲欲

強欲

○欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の



○欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の

利欲

利欲

貪欲

強欲

利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の

利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の

利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の  
利欲の七情の

呂氏春秋の回向人令を  
 治工と欲を共なり清眞  
 各別と欲り令と欲り  
 而して人令を令と採  
 此れを令と採  
 皆宜と立人の令とぬ  
 止むハ何れを東と採  
 て回向人令と採  
 令と立人の令と心採  
 要と回向を市にぬ  
 此れ欲心採て知得  
 初と金と剛と求むる  
 利心採りてはて眞沈溺  
 此れ欲心採りてはて眞沈溺



鹿と人  
 鹿と人  
 鹿と人  
 鹿と人

○ 欲人大妙神徳泥宣

捨果て利あるき物と心下り雲の降日人報世界を告判の  
 白記とあふ人の心の欲あぞ何れも大いあること今世の徳  
 紫魔兼令の祖と根と行跡泥も鏡の光明と照し兼令  
 のあふ極あく紫地獄の沙汰も令次才十王の如進も  
 ごとく闇魔の株香あめく酒顔も是がぬ糸地蔵の教り  
 三く九夜捨るといふ口と闇とく兼あふく照し五乃  
 兼令兼あ士の報と冥界をくして若神花是あくく  
 穢あま走る報の猫も捨る日何れ令の結もあふ時あつ

禍福得失夫命ありたりも命が歎の世の中ふ命が  
けき日本流も師事不端居の切も立以て市を去るが漢に  
勅平の切後も之れ命故の過あり之子世界歎の爲ふは  
此のたふると忘る情歎ありて佛も福者名満と悦ぶ歎  
より命に孔子も富と貴とい人の欲する事ありと教ふ  
は其晋の魯褒の神傳を著して是を觀むと兒の如  
字と孔方といふ之を笑ふ所の貧弱とあり之を滑則る富  
富とあり翼ふくして飛鳥ふくして走る鹿教類と解之歎  
融とくと同く融と其の定ふ處より少くとも命の命と後

は後之餘る命を利ありて命の命を命と爲す何ぞ必書を讀む然して  
後富貴ありん徳ありて貴く勢ひありて熱く命門を擲  
て命門に入危きことも安かき志むべし死も活も命に貴き  
賤むべし生も救むべし後と曰後身ありて鬼と倭志むべし  
允今人只此の命と漢も倭も昔より歎きあひて命を愛せし  
命を遠戦國の以蘇秦が傳ふ富貴則親戚も之を畏懼  
命を命をば之と種易況や凡人字ありて命を命に命を磨  
命の命を漢朝が傳ふ世人交と後く黄金と酒を命と  
命を命が命を命に命を命に命を命に命を命に命を命に





○ 欲との小獣

法華経曰く色声香味觸法と云ふ欲との小胸義要の若くは  
 之を五欲二十欲と云ふ人よ二十種の欲ある也  
 色欲利欲貪欲強欲の類とてを周より其二十種乃欲  
 下五類り欲塊りして一々の無欲とある号て欲の欲との小  
 の中欲取より生じて大なる世界小なる諸唐天竺紅毛朝鮮東夷  
 南蛮暹羅安南呂宋に殊家古南慎やても欲欲の極は  
 西の東のとも常人の心の底に潜るは外ありは



遂にそを神と看する者も老を遊ばず業窟飽法城を破り日許  
理心山の標を野野万八とすその欲中欲欲世國旗のあり  
かゝ狸の角を割滅法は八種を治の六のふ三人の徳をかりし  
む事をして先法を教ち辱もよく是と生捕ぬ法之の徳を信の  
るを物とせしむ二人連年の遊病一日は萬金の若人今を以  
希金を圓ふ令あじとを欲と生捕窟の川徑隈のまをふる  
る重物と出世老るるも其法面及くその欲の皮あつて死を罪  
犯すく進出し流すて業窟の為一完おと入るる手摺

此欲の欲は能くらむ月の無く我身の危きを忘るる金の憂  
とま縲んと勝負の手放とを一銀の刃と流るる地獄の一旦死より  
踏むはく高利の地獄は落るるも踏倒せし唯ハ起ぬ欲をるるが  
悪法は車も乗入摺ぐまは真まをを欲のたをり多とまを以  
撲よむんを悪道は入るるを好む邪法はたよ罪個く地を摺  
退ても其之をやむるも出ぬくもとせば法をよふ人間の皮を剥  
たる罪は是あり故に神佛の抗ともち仁義徳智信の  
鉄を以て業窟を破るる所の義理はかゝるるを以て世の石止火

そのうち  
其容貌と寫し、懶惰放蕩の人よまは

**頂**  
ついでにそのあつちをきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

**面**  
顔のほつちをきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて



欲獸之圖

傍りの地をが  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

**眼**  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて

あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて、  
あつちのうしろのきざりてゆへよと云ひて



仁義禮智信









荒湯有武  
 焼野浦元八  
 物系流象  
 樹元誠  
 大合誠  
 無事のふ美  
 多名の  
 寓地



有切の志跡を以て青紙の形をせし花か思案と傳ふ其凡の  
 養懐之世間並小肩を垂る者理も進色瘡をふるて  
 と一更田の露ぎくまほして多花の博熟を色六年中定時  
 借法の色法く刺て物貴しお空をせん手か寒くく病を  
 ろを末屋も潤極も十把下かけ月小床かぐり前寄を以て  
 若か改つ返お福よりしませうとての事なき瘡く顔と色色部  
 て顔と出り面だといふふらんよあふりあといと吐りけれ復の  
 とのも果きてとてく出てけ入替り、右着や物物明りや一昨年今  
 月今宵正月の物と多し、く臥床をさつさく一崩一三年我

何うか、今月、是れとも、物定まを、費を、と、性、向つら、と、悪いと、公、易  
 と、兵、備、候、その、多、く、毎、年、結、候、く、兵、備、候、と、な、た、つ、け、て、是、女、房  
 へ、側、り、御、物、と、先、の、借、法、債、を、あ、り、跡、の、代、替、物、賃、を、い、ふ、は、切  
 て、の、御、業、を、出、来、ぬ、月、小、六、夜、の、掛、掛、で、し、半、分、海、を、奉、給、る、二、年、三、年  
 是、の、引、換、を、更、少、の、系、目、へ、有、ぬ、と、所、説、返、一、の、吹、り、け、を、是、の、御、合  
 と、取、ら、れ、ま、し、新、袋、の、二、分、も、出、来、れ、ば、ま、し、二、年、三、年、是、と、違、へ、違、惑、と  
 御、業、と、獲、ぶ、は、違、一、く、ら、あ、と、ま、ま、と、違、り、て、来、ま、し、と、公、説、つ、て、場  
 仍、又、け、ある、故、り、か、ら、違、の、人、に、向、た、半、年、候、う、の、御、賃、の、不、清、給、候  
 是、の、心、底、知、く、長、の、御、候、も、此、の、毒、ゆ、へ、地、ま、ま、と、違、り、今、月

まふり等閑不垂れくしき<sup>せ</sup>是<sup>ま</sup>非<sup>ま</sup>あくる<sup>ち</sup>地<sup>ま</sup>を<sup>か</sup>との<sup>店</sup>入<sup>用</sup>の<sup>事</sup>  
多<sup>退</sup>的<sup>後</sup>元<sup>店</sup>交<sup>取</sup>も<sup>届</sup>け<sup>く</sup>垂<sup>さ</sup>と<sup>節</sup>場<sup>備</sup>  
難<sup>止</sup>く<sup>備</sup>命<sup>出</sup>り<sup>預</sup>りの<sup>姓</sup>名<sup>書</sup>取<sup>不</sup>其<sup>る</sup>の<sup>八</sup>早<sup>春</sup>か<sup>ら</sup>忠  
あ<sup>が</sup>ら<sup>の</sup>中<sup>掛</sup>合<sup>形</sup>形<sup>此</sup>の<sup>有</sup>中<sup>女</sup>房<sup>ハ</sup>横<sup>の</sup>う<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>按</sup>六<sup>針</sup>  
醫<sup>と</sup>之<sup>強</sup>く<sup>中</sup>を<sup>下</sup>の<sup>伯</sup>父<sup>の</sup>預<sup>記</sup>部<sup>を</sup>の<sup>花</sup>御<sup>の</sup>書<sup>状</sup>と<sup>す</sup>  
内<sup>店</sup>交<sup>の</sup>息<sup>子</sup>孫<sup>を</sup>取<sup>と</sup>披<sup>露</sup>は<sup>身</sup>を<sup>経</sup>系<sup>不</sup>後<sup>候</sup>と<sup>う</sup>ま<sup>せ</sup>て  
義<sup>理</sup>と<sup>ぬ</sup>ん<sup>ぐ</sup>あ<sup>れ</sup>福<sup>と</sup>備<sup>備</sup>の<sup>云</sup>法<sup>を</sup>取<sup>れ</sup>が<sup>家</sup>業<sup>も</sup>日<sup>御</sup>と  
あ<sup>ら</sup>う<sup>取</sup>得<sup>あ</sup>れ<sup>と</sup>取<sup>入</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>義</sup>理<sup>も</sup>人<sup>情</sup>も<sup>知</sup>ら<sup>ず</sup>  
か<sup>ま</sup>す<sup>物</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>と</sup>地<sup>お</sup>も<sup>ろ</sup>不<sup>備</sup>備<sup>う</sup>ぬ<sup>く</sup>の<sup>を</sup>懸<sup>け</sup>く<sup>備</sup>備

と<sup>又</sup>く<sup>恥</sup>と<sup>か</sup>け<sup>とも</sup>無<sup>く</sup>の<sup>ふ</sup>無<sup>く</sup>あ<sup>る</sup>大<sup>合</sup>戦<sup>の</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>合</sup>中<sup>に</sup>討<sup>つ</sup>  
老<sup>を</sup>人<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>一</sup>実<sup>を</sup>無<sup>く</sup>の<sup>子</sup>孫<sup>は</sup>古<sup>今</sup>福<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>れ<sup>ども</sup>  
義<sup>理</sup>人<sup>情</sup>不<sup>肯</sup>が<sup>ゆ</sup>に<sup>は</sup>店<sup>交</sup>の<sup>義</sup>理<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>が<sup>く</sup>身<sup>上</sup>軍  
配<sup>と</sup>俱<sup>お</sup>お<sup>う</sup>の<sup>世</sup>所<sup>必</sup>玉<sup>の</sup>越<sup>後</sup>戦<sup>記</sup>他<sup>の</sup>せん<sup>き</sup>を<sup>改</sup>痛<sup>ま</sup>  
病<sup>惻</sup>懐<sup>の</sup>人<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>救<sup>度</sup>の<sup>不</sup>義<sup>理</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
の<sup>名</sup>も<sup>更</sup>も<sup>な</sup>ず<sup>一</sup>素<sup>肌</sup>軍<sup>の</sup>装<sup>の</sup>陣<sup>七</sup>種<sup>ま</sup>か<sup>ら</sup>笑<sup>後</sup>の<sup>名</sup>  
地<sup>も</sup>遠<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>の</sup>古<sup>地</sup>一<sup>邊</sup>も<sup>な</sup>敬<sup>の</sup>か<sup>を</sup>く<sup>今</sup>の<sup>地</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
は<sup>何</sup>ハ<sup>被</sup>装<sup>の</sup>小<sup>治</sup>場<sup>和</sup>辱<sup>と</sup>臨<sup>す</sup>ま<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>荒<sup>場</sup>有<sup>武</sup>  
煙<sup>並</sup>流<sup>光</sup>八<sup>の</sup>落<sup>地</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>一</sup>窮<sup>地</sup>あり



山神の御祭礼  
 家内  
 松竹  
 山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼

山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼

山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼



山神の御祭礼

山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼

山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼

山神の御祭礼  
 つま  
 山神の御祭礼

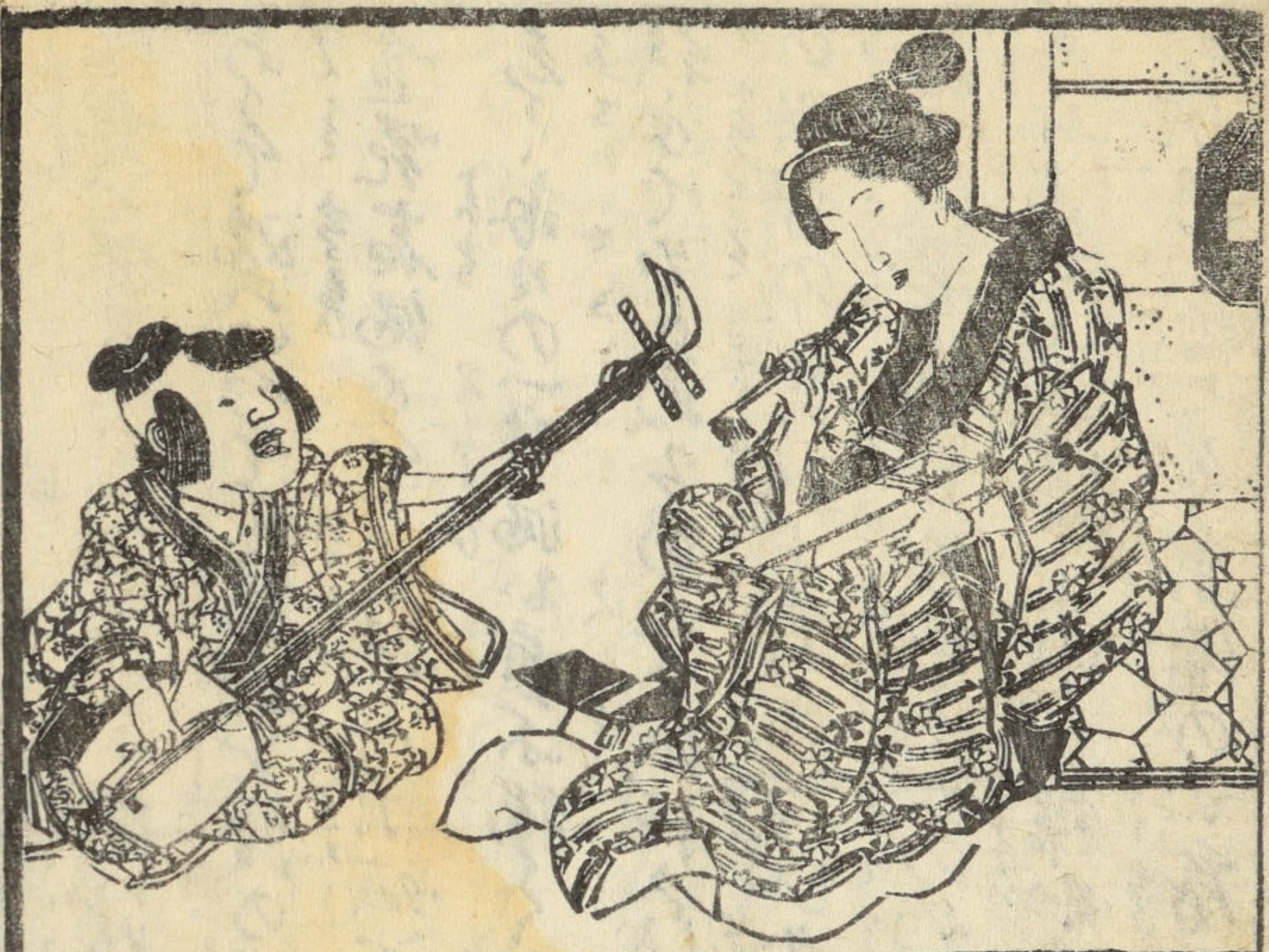
○山の神の社より御祭礼

山の神の人者へ電將軍造営の地にて基所の軍配採記述本を  
事なき不恒海に巻込に女房大より一統敵討の恩作して法人出入  
の者奇蹟界とありは安堵ありしむす所の靈地あり折るに  
由来と尋ふ問其人遠國より僕の久きとありし折るに  
猿物一代はとの身とありし惣頼縁者高他は折倒合の十女あり  
の方と夫婦あり後隠と欠奉と欠和と欠三角の法とありし  
女房の店までふありと区に女房不孝ありと病死し一生不自堂の  
根括ありし猿物今年六十六才かえと実子なくお疎りの月産

とありし客方の後妻とありしより家内の経歴も幸己が好使と  
折ひ番中女下種小僧よりむすむすを女現界の坊主とありし  
山の神の羽と敷り今日の法も入聖旨の不思議とありし高  
根有る事とありし猿物山の神より見えしとありしと後と  
智多と中女と此り罵り猿子禊のめまももとありしと  
後より猿物の折を弱く山の神より見えしとありしと  
清と目の茶を焼く老ありしとありし山の神へ増長月産し  
お茶を中ほく高賣のそととありしとありしとありしと  
五人の電將軍山の神と現下なることありしとありしとありしと

いんじん祭礼と傳へるは身一は番次横鹿の合ぬぬ定り賄賂と心の  
神ふまれば忽不肖尾と氣絶ふを利益違ふけは六女の際れを  
小指の使ふたきくひも番次の例と若し利益と兼るものうは  
祭礼中も小判とものく菊の花と違ひ織とはて若し遠慮の  
半終袖口の小切とものくち茶に梅(半)天の片表下衣のどり  
おもちるへと結あんの敷心の神魚と根ふると身一とく梅と  
の違ひ物と梅茶の衣裳と号身分不執意の衣敷とものく  
まをる烟草入鼻紙袋とて且形襦袢と薄く心の神と白蛇  
を廻し梅のちのちとちりけは六女夜泊りに出まひ物と号く

酒肴と答書無心の神へ下地へ好きう世ると見流しと戸の癖  
あつて流へりても襦袢と敷の野所鳴りう二日ふあげと主婦  
喧嘩者酒とて昼飯と朝飯と一夜ふ食ふ物朝寐とほ葉好  
るく毎日の一拜酒を負ふ獨り祭と指と縫針業へ襦袢とて  
我身で出来ぬそのと紙はうひのあふのそお里の糸とて流れ  
の果男の客の別々おね扱ひ女の客と扱扱も不執おたる物  
あり人並くふ出来通く女の初流也もるく若者小出と扱扱と  
とあつてに様扱せりのと襦袢の書ひわく是のそとととと  
るら初まて七を兼備の女房と鼻毛を廻してまをんをさる



白痴の居るとその心身より極るの不完の如き日由りて  
小き湯水の如く鏡の黄十病蟹の物とて  
これとて世間の物とて思ふと多と存せとて又みえたる故に  
と厭む世間の物とて思ふと多と存せとて又みえたる故に  
とて思ふと多と存せとて又みえたる故に  
是より思ひおろしとて善悪の事とて  
此物の別とて思ふと多と存せとて又みえたる故に  
とて思ふと多と存せとて又みえたる故に  
何代とて思ふと多と存せとて又みえたる故に

取降りて家内には赤乳と信せしむる人忠と雷とて改の意  
前已に懐引負る人智と命とて元身主人の不朽の意  
所以ありとて業折縁と回世と百歳の人年一担千年の針糸  
と作兒孫へ自ら兒孫の福あり兒孫と抱てる本と作更  
英とて心懐ゆ一個は絶建て我一代と元の生廻るとり各  
番ありて財と命と命の番人となりて死者とて思ふと  
○他小異るる運命体序  
一日の初めに鶴鳴ふありと云物記の森とて元の種ありとて  
海も家業の種ありと云物記の森とて元の種ありとて

て夜食と求むるのたぐひ祝と育む者も二箇の糸と下爲  
ふ世帯と育む娘もあつた者も物魚の巻くはあつた者の所  
空間の待と撞いて朝飯の巻くはあつたものなうゆ之巻くは  
まゝ美い元の巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
長々れ祝父の巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
舟の揺り煮たの巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
はなはたの巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
種と巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
藤も家業の内と巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの

小勝く琴と鼓とる者このと撞くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
て巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
むもとの世間と巻くはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの

○貧乏の道所

世も僕も四回病の病より貧乏はあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
不れはあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
富貴もあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
賤もあつたものなうゆ之巻くはあつたもの  
あつたものなうゆ之巻くはあつたもの



金穀は白人貪りて智種く馬鹿て毛世と云り人笑ふ道で  
其心初願して字望の智恵も困とす是も拙く智恵の終  
貪るは晦もその子文盲愚昧の白痴も金満かれば人をも  
誘ふと生に才ありとすとも貪るんを要人は縮をんは論信可  
子直子回貪はて論と云く道で誘ふもく人の何如といひて  
孔子の曰く可也貪りて樂し富く後と好悪も若くは教を以  
て貴しも徳とと貪賤少も樂む男子は列く是豪雄  
ふさく重宝君子は負名は城郭と云れども兎角積小徳も  
て世よある甲斐は無事あり是下人の城も世もか金穀の

世中より不ぞ款より過り利徳信ふ卑和といふ人神丹未  
割を以て黄金を十斤と作く人の貪病を救ひいと云ふ  
是ぞ貪の病の妙薬もはばる廉も然る業も求む易し  
実も得終る者いふ初初の本をわれば貧を患ひ遂て愚昧を  
愛ふなり 此名開利款の迷ひるる悟えさるるなり

○名取取らる徳をみればと不惑し

佛祖通載は向世智辨疑へ人情款慕す言而ありて以て莫  
當と云ふなり世智賢と共利款は徳と徳と云ふ事あり  
恥と捨ても取ら徳と云得て名を取らる徳を名と云と款

漢天たる勅遠名を礼と云ふ虚名を食ひて人々を以て己の徳と  
徳と云ふとあり是を徳と稱と云ふ利徳の事と公清く恥も持た  
徳と實徳と己が儲と云ふと徳と取と云ふと云ふ徳の限  
あり君子の徳と終して徳と存まば及ぶ徳あり小人の徳と存まば是を  
賢も徳と徳と云ふより徳報ありと信ず君とたふされば徳も徳た  
子の親も孝なり此の君も忠なりも意也と終する所の徳也  
たう徳と所謂徳と持本の本と云ふ徳は身を操て人の痛を知と  
忠忠の乃と云ふと子孫伝ふと云ふ一の徳也  
善惡道中記

一筆齋主人戯作

漢齋英泉翁筆

繪本英勇鏡 全二冊

哥川國直筆

繪本武者袋 全一冊

山田常典大人校

百人一首女訓抄 全一冊

人間一生

獨案内

善惡道中記

漢齋英泉画

畧画

立齋戲筆

淨瑠璃圖會 全一冊

嘉永四辛亥年正月再刻

京橋銀座一町

東都書肆

頂恩堂

木屋又助梓

初傳より人間一生の如く道中記も  
此の善淨瑠璃の所載と云ふ  
画はありありと云ふ画も本  
出集

いふに紙類冊の徳言を毎  
且その意味も如くやい  
事女子の徳も云ふ画も  
かみかみむきの画も云  
しと云を物も云ふ画も  
画本なり

欽定  
卷下  
市川  
氏